



カラヴァッジョ展

国立西洋美術館 2016年3月1日～6月12日 (3/7 記)

CARAVAGGIO and his Time: Friends, Rivals and Enemies 日伊国交樹立 150 周年記念

- ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ (Michelangelo Merisi da Caravaggio 1571.9.28～1610.7.18) とカラヴァジスティ (Caravaggisti / カラヴァッジョの追従者・カラヴァジェスキ) の展覧会。

暴力的なカラヴァッジョは刀剣不法所持、殺傷事件などいくつかの裁判沙汰を起こしているが、その激しい性格は、17世紀の大潮流バロック絵画を生み出した。マニエリズムに対して、背景を描かず、強い光によってドラマティック場面や対象を際立たせた。この三次元形態の写実的な表現は革新である。

- カラヴァジスティたちは、カラヴァッジョの解釈の上に独自の個性を出した。カラヴァッジョに比べて柔らかい光で上品さを強調した。



カラヴァッジョは3枚の画を手元に残したと言われている。今回鑑定により本人の筆と確定された『法悦のマグダラのマリア』(Mary Magdalene in Ecstasy 1606年)が、そのうちの一枚ではないかと言われている。世界初公開。

『芸術家列伝』(Giovanni Pietro Bellori 1672)から抜粋したと思われるパネル展示があった。

カラヴァッジョは、

*モデル以外は師と認めない。

*自分以外の画家を認めない。

*有能な働き手 (ヴァレントゥオーモ Valentuomo) とは、画家で言えば上手に画が描けて、自然を見事に模倣できる者である。

として、自らを唯一忠実な自然の模倣者と称した。当時の画家たちの中には、激しいライバル意識があった。



笑い顔より泣き顔が難しい。若きカラヴァッジョは、困難な「感覚」表現に挑戦した。トカゲに噛まれた瞬間の驚きと痛みの表情を捉えている。

『トカゲに噛まれる少年』1596-97年頃



1599年に聖カエキリアの墓が開けられてから、旧約聖書で敵の首を取った英雄や神話のメドゥーサなど「斬首」の画が流行。

これは本物の楯にキャンバス地を張ったもので中央が窪んでいる。

『メドゥーサ』

1597-98年頃



カラヴァッジョは「レオナルド・ダ・ヴィンチの影響で自然光に照らされた対象を詳細に描く」伝統があるミラノで静物画の修業をした。

『果物籠を持つ少年』1593-94年

カラヴァッジョはローマで8カ月働いた。ローマではジュゼッペ・チェザーリの工房を中心に静物画が発展した。



『マッフェオ・バルベリーニの肖像』1596年頃
写実主義的表現でありながら、内面を写し出し、時には少し美化も加えるのが当時の肖像画。

ここに載せていない
一番のお薦め !!
『ナルキッソス』
是非本物をご覧ください。

1596年3月以前ローマに上京—1606年5月殺傷事件—34歳ローマ追放—ナポリに1年程滞在—マルタ滞(騎士団に画家として名を連ねる)暴力事件—シチリアを経てナポリ—ローマへ向かう—上陸取調べ中に、画を積んだ船が行方をくらます—傷心、やがて死。画風の如く強烈な光と影に彩られた人生。